

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：33919

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13859

研究課題名（和文）ブルーナーの教育論における客観的な知識の性質としての客観性の解明

研究課題名（英文）Elucidation the Objectivity as a Property of Objective Knowledge in Jerome Bruner's Educational Theory

研究代表者

嶋口 裕基（Shimaguchi, Hiroki）

名城大学・その他部局等・准教授

研究者番号：80631936

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカの心理学者であるジェローム・ブルーナーが想定した客観的な知識の性質としての客観性を解明することを目的として、本研究を進めた。本研究によって、まずブルーナーにおける知識の真偽判断はネオ・プラグマティズムに依拠していることを明らかにした。次に、ブルーナーはカール・ポパーのいう世界3を客観的世界であると見なしていることを示し、世界3を視点にブルーナーの心理学説や教育論を解釈できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでブルーナーは古典的プラグマティストとみなされてきた。それゆえブルーナーのプラグマティズムはネオ・プラグマティズムに位置づけられることを示したことは、本研究の大きな学術的意義といえる。またポパーのいう世界3から、客観的とは思考を外化したものという意味であるとする解釈を示し、それをブルーナーの理論にあてはめられることを示したので、客観性の感覚を育む新たな視点・論点を提供できうる点に社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to elucidate Jerome Bruner's assumption of objectivity as a property of objective knowledge. Firstly, I clarified that Bruner is based on neo-pragmatism when he judges the true of knowledge. Secondly, I pointed out that Bruner regards objective world as World 3 proposed by Karl Popper. In this result, the possibility that Bruner's psychological theory and educational theory can be interpreted from the viewpoint of World 3 is suggested.

研究分野：教育思想

キーワード：ジェローム・ブルーナー プラグマティズム カール・ポパー ウィリアム・ジェイムズ リチャード・ローティ ネルソン・グッドマン 構成主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アメリカの心理学者であるジェローム・ブルーナーの教育論は、彼が『教育の過程』(*The Process of Education*, 1960) を出版して以来、現在まで検討が加えられている。これまでブルーナーの教育論の主な研究対象になったのは、「発見学習」や「構造」といった概念であった。しかし近年、従来とは違う概念を検討する研究がなされるようになった。その最たる例として挙げられるのが「フォークペダゴジー」である。フォークペダゴジーは『教育という文化』(*The Culture of Education*, 1996) で提示された概念で、「人々が抱いている教授、学習、成長に関する考え」を意味する概念である。フォークペダゴジー研究は、その理論的検討をしたり、実践への応用を行ったり、ブルーナーの教育論をプラグマティズムの教育理論に位置づけたりするために行われている。

フォークペダゴジーにかかわる研究において、理論的観点から問題点が指摘されている。それはフォークペダゴジーを観点に導き出された教授-学習における知識に関わるものである。ブルーナーはデイビット・オルソンとともにフォークペダゴジーを提唱し、フォークペダゴジーを観点に教授 学習を4種類に分け、その4種類において習得される知識を次のように想定した。すなわち、「手続き的知識」「命題的知識」「正当化された信念」「客観的な知識」の4つである。このうち、客観的な知識に対し、「客観的な知識が示す客観性とは何か不明確である」という問題提起がなされた。

この問題提起に対し、ブルーナーのいう客観的な知識を「制度的な知識」と規定しなおすことで、客観的な知識が示す客観性について論じた研究がある。しかしこの解釈によれば、客観的な知識が命題的知識と正当化された信念を乗り越えたものであるとされている。一方、ブルーナーは命題的知識・正当化された信念・客観的な知識の間に優劣関係を定めていない。ブルーナーの視点に立てば、制度的な知識として客観的な知識を再規定することは適切とはいえない。

それゆえブルーナーのいう客観的な知識における客観性とは何かという問いは、依然未解決といえるものであった。このことから、ブルーナーのいう客観的な知識における客観性を探究し、客観的な知識における客観性を明らかにすることが本研究課題のテーマとした。

2. 研究の目的

以上を踏まえれば、ブルーナーのいう客観的な知識の客観性を明らかにするには、制度的な知識とはちがった視点で検討を行う必要がある。そこで本研究では、プラグマティズムとカール・ポパーの反証主義に着目することにした。プラグマティズムに着目したのは、ブルーナーが知識の真偽判断の論拠をプラグマティズムに求めていたためである。ポパーの反証主義に着目したのは、ブルーナーが反証主義によって補強しながら、知識が客観性としての性質を帯びる過程を描いていたためである。

以上のことから、本研究の目的を「ブルーナーが依拠しているプラグマティズムと反証主義を観点に、ブルーナーが想定した客観的な知識の性質としての客観性を解明すること」とした。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、(1)ブルーナーが依拠しているプラグマティズムはどのようなものなのか、(2)ブルーナーはプラグマティズムと反証主義からどのように客観的な知識の性質として客観性をとらえているのかを、文献を読解し精査することによって明らかにすることにした。具体的には下記のとおりである。

(1)ブルーナーはリチャード・ローティのプラグマティズム解釈を参考にし、知識の真偽判断について論じている。このことに注目し、ブルーナーが依拠するプラグマティズムを検討した。

ブルーナーがローティのプラグマティズム解釈で特に着目しているのが、ウィリアム・ジェイムズの真理観である。しかしブルーナーのいう知識の「真」はジェイムズのいう「真」とは異なるという指摘があった。このことから、ブルーナーのいう知識の「真」とジェイムズのそれにどのような差異があるのかを検討した。

次に、ブルーナーはローティのプラグマティズム解釈を参考にしているので、ブルーナーの依拠するプラグマティズムにおけるローティの影響を検討した。ブルーナーが依拠しているプラグマティズムには、ローティの理説だけでなく、ネルソン・グッドマンの理説も含まれていることが、その検討過程で明らかになった。そこで、グッドマンの理説との関係も踏まえながら、ブルーナーのプラグマティズムにおけるローティの影響を検討した。

(2)ブルーナーは客観的な知識を論じる際にポパーの反証主義に言及している。ポパーもまた反証主義の視点から客観性について論じている。しかしポパーは反証主義からだけでなく、彼が提唱する3世界論においても、客観性について論じている。具体的には世界3のことである。ブルーナーはポパーの世界3にも着目している。このことから、反証主義のみならず、世界3に着目して、ブルーナーの客観的な知識における客観性について検討した。

4. 研究成果

(1) ブルーナーとジェームズにおけるプラグマティズムの真理観を比較したところ、両者には根本的な差異はなく、同質の真理観に基づいていることが示された。

ブルーナーのプラグマティズムは構成主義と関係している。ブルーナーのいう構成主義は、知識や実在はわれわれが構成したもとのとする立場のことである。この立場は、グッドマンの世界制作論に依拠している。しかしブルーナーは、グッドマンの世界制作論では知識や実在の真偽をめぐって相対主義に陥ってしまうと批判する。そこでブルーナーが着目したのがローティのプラグマティズム解釈である。

ローティのプラグマティズム解釈にはジェームズの真理観が取り入れられている。ローティのプラグマティズム解釈を参考にするブルーナーにとって、このことからブルーナーはジェームズの真理観を取り入れているといえる。

さらにローティのプラグマティズム解釈では、ジェームズの真理観から、ブルーナーが「プラグマティックで、パースペクティブな問い」と呼ぶ、「それを信じるとはどういうことか」や「もし私がそれを信じたら、私は何に関与していることになるのか」という観点から知識や実在の真偽が判定されることになる。このようなことから、ブルーナーはローティのプラグマティズム解釈に基づけば、構成主義は相対主義に陥らないと主張する。すなわち、ブルーナーはローティのプラグマティズム解釈から「プラグマティックで、パースペクティブな問い」を取り入れているということになる。

構成主義から知識や実在の真偽判断までを含めてブルーナーのプラグマティズムとした場合、ブルーナーのプラグマティズムはグッドマンとローティの理説に影響を受けているといえる。

以上のことから、上記の研究において次の二点が成果として提示できる。

1. ブルーナーの真理観はジェームズの真理観と異質であるとされていたが、両者は同質である。
2. ブルーナーはローティのプラグマティズム解釈によって、ジェームズの真理観を取り入れ、かつ、ローティの考えを取り入れることで、自身のプラグマティズムを構築している。

2点目の成果を得るために行った検討において、次のことも明らかになった。すなわち、ブルーナーはグッドマンの構成主義を取り入れているために、言語論的転回を経ているといえ、ブルーナーのプラグマティズムはネオ・プラグマティズムとして位置づけることができるということである。

従来、ブルーナーはチャールズ・サンダース・パース、ウィリアム・ジェームズ、ジョン・デューイに代表される古典的プラグマティズムの陣営に位置づけられてきた。ブルーナー自身もそのように自身をみなしている。しかしそれはブルーナーがグッドマンの世界制作論を自らの心理学説に取り入れる前のことである。グッドマンの世界制作論を取り入れたブルーナーのプラグマティズムは、ローティと同じ陣営であるネオ・プラグマティズムに位置づいているといえる。それゆえ、従来とは異なるブルーナーのプラグマティズム解釈を提示することができた。

この成果により、ブルーナーの教育論を古典的プラグマティズムに基づく教育論ではなく、ネオ・プラグマティズムに基づく教育論として解釈が可能になると考えられる。ブルーナーのプラグマティズムをネオ・プラグマティズムに位置づけられると明らかにしたことは、本研究の大きな成果といえる。

(2) 当初はポパーの反証主義のみに着目することを計画していたが、研究を進めるうえで、ブルーナーがポパーの3世界論における世界3に注目していることに気づき、また、ポパーは世界3を論じる際に客観性についても言及していることに気づいた。そこで世界3に着目し、ブルーナーのいう客観的な知識における客観性について検討を試みた。

ポパーは世界3を客観的な世界とし、言語によって語られたものを主な世界3の住人としている。このことより、ポパーのいう客観的とは、「思考が外化されている」という意味合いを持つと解釈した。

ブルーナーは文化を客観的世界とし、それをポパーのいう世界3としている。ブルーナーにとって文化は心によって生み出されたものであるため、ブルーナーも客観的ということポパーと同じように、「思考が外化されている」という意味合いで用いていると考えられる。

このことを視点にしたところ、ポパーの世界3にはブルーナーのいうナラティブ(ストーリーを語るなど、ストーリーを作ること)も含まれており、加えてブルーナーにとってナラティブは思考の産物であるため、ナラティブは客観的なものであるという洞察に至った。

質的研究をはじめ、ナラティブを研究方法あるいは研究対象にする場合、客観性ということがたびたび問題になる。というのも、ナラティブは自然科学が明らかにするものと比べ主観的であり、客観性が担保されていないとみなされがちだからである。

しかし本研究では、客観的であるとは自然科学が想定しているようなものではなく、思考が外化されたものであると捉えた。その意味で、思考の産物であるナラティブは客観的といえるものである。このことから、従来の主観 - 客観とは異なる枠組みでナラティブの客観性をとらえることができるという可能性を示したことは一つの大きな成果といえるものである。

その一方で、ブルナーのいう客観的な知識における客観性は、思考を外化することと関連していることを示唆できたものの、それに基づいた教育実践がどのようなものであるかといったことを明らかにすることはできなかった。ブルナーのいう客観的な知識に基づくと、教育を考えるうえで従来とはどのように異なる視点をもたらすことができるのかということを解明することが、今後の課題として挙げられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 嶋口裕基	4. 巻 19
2. 論文標題 ブルーナーとジェイムズのプラグマティズムにおける関係性の再検討 「真」を中心にー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名城大学教職センター紀要	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 嶋口裕基
2. 発表標題 ブルーナーの構成主義におけるローティの影響について
3. 学会等名 日本デュイ学会第64回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山草介, 庄井良信, 嶋口裕基
2. 発表標題 ナラティブラーニングの射程とその展開可能性
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------